

傷寒・金匱方劑解説 56 きー8

音順	方劑名	生薬構成 および製法・服用方法
	傷寒論・金匱要略条文	読み および解説・その他
きー8	枳朮湯	<p>枳実（苦寒）4.9g・白朮（苦温）2g 上の2味を水200mlを以って煮て120mlとなし、3回に分かれて温服すべし。 服用後、腹中がやわらかくなったものは、薬の効ありとする。心下のしこりが散ずるはずである。</p> <p>水気病脈証併治第十四第34条（金匱要略）</p> <p>「心下堅く、大きき盤<small>ばん</small>の如く、辺り<small>あた</small>旋杯<small>せんぱい</small>の如きは水飲<small>すいぎん</small>の作すところ、枳朮湯之を<small>つかさど</small>主<small>しゅ</small>る。」</p> <p>解説 心下に堅い所があつて、大きさが盤（皿）の様で丸くしこっている。こうなるのは水飲によるのである。枳朮湯が主治する。 「方劑決定のコツ」の注釈 枳実で心下の熱あるしこりを解きほぐし、白朮で表の冷えを温めて、枳実で解きほぐした中にある熱を小便と共に利す。 枳朮湯は、即ち内に熱あり、外に寒あるものに用いる。 枳朮湯（枳実芍薬散 一芍薬 + 白朮）は、心下に水飲の停滞があり、血の循環が悪くなり、熱を伴うしこりを生じるもので 白朮で中に滞っている熱を外に導く。 枳実芍薬散は、血虚によって血の循環が悪くなり、しこりを生じるもので、枳実で内の熱によるしこりを解きほぐす。</p> <p>枳朮湯証 新古方薬囊によれば「心下胃部に大きなしこりがあり、又全身にむくみある者、小便の出は少なし、大便も少なき者多し。食欲は割合に少ない方では無く、心下のしこりは、こぶし大のものもあり、或は大きいこともあり、稍小さいこともありて一定しない、其のしこりは上から押して力あり、痛みは余りなし、又しこりの形状は盃を伏せたる如きものなり。」と記されている。</p>